巻頭特集

驚きと感動のその先に――仲間との絆・地域との交流

山形大学　ジャグリングサークル

学生たちの若い活力や元気さを表すように、空中を躍動するボールや様々な道具たち。「ジャグリング」をイベントやお祭りで目にしたことがある方も多いのではないでしょうか？今回は、山形大学ジャグリングサークルのメンバーの皆さんに、ステージに上がるまでの苦労や勉強との両立などについて、お話を聞いてきました。

体育館での練習の様子。

学生たちとジャグリング

県内唯一の国立大学である山形大学。米沢市内にある工学部キャンパスには、県内外から学生が集まり、日夜勉学に励んでいます。部活動やサークル活動を行っている学生も多く、学生生活をより充実させる時間になっているようです。

山形大学ジャグリングサークルは、二〇〇二年頃発足しました。現在は工学部キャンパスに八名、県内の他学部も含めると約三十名ほどのメンバーが在籍しています。今回お話を聞いたのは、五十回を超えるステージを経験している三年生四名と、一年ほどの練習期間ながら着実に技の数を増やしている二年生二名の計六名です。

ジャグリングとは、ボールをお手玉のようにリズミカルに放り、また受けることを繰り返したり、スティックやコマなどの道具を使って技を披露するパフォーマンスです。専用の道具はありますが、手品やマジックのように仕掛けはなく、練習を積み重ねて技を習得します。

練習とステージ

会長の前田雄大（まえだゆうた）さん（三年）に、日々の活動について教えてもらいました。「練習は、ほぼ毎日やっています。体育館を使える月曜日・木曜日以外は外で練習をするようにしています。」ジャグリングは指や手、体全体で技を覚えるため、一日でも道具に触れないと感覚が鈍るのだそうです。

発表の場としては、学内の発表会や学祭だけでなく、地域のイベントにも多く出演しています。副会長の木村和樹（きむらかずき）さん（三年）は、「置賜地区内の道の駅や施設、地区のお祭りなどから呼んでいただき、パフォーマンスをしています。腕試しにもなりますし、度胸もつきます。頂戴した出演料で道具を購入したり、打ち上げをしたりして、サークルの向上につなげています。」と話してくれました。

今までで一番感動したステージは？と聞くと、副会長の森凱仁（もりときと）さん（三年）は、「初ステージですかね。人前で何かをするというのは実は苦手だったんです。初めてのパフォーマンスですからかなり緊張していたんですが、いざ始まるとお客さんの拍手があたたかくて、とても楽しいステージになりました。」と語ってくれました。同じく野尻亮真（のじりりょうま）さん（三年）も、「二年生の時の学祭で、メンバーや知り合い以外から拍手をもらった時が印象に残っています。」と、お客さんの反応があることで達成感がより高まると教えてくれました。

地元のイベントでのパフォーマンス。学生ならではの若々しい、力一杯のパフォーマンスが観る人を自然と惹き付けているようです。